

♣ 書評

企業が伝える生物多様性の恵み ～ 環境教育の実践と可能性 ～

評者 石川 恵也

著者たちの、生物に注ぐ優しい眼差しと自然の恵みに対する感謝の念とが、全編に満ち溢れた好著である。企業と環境保全との係わりに関心のある者は、最初に手に取るべき一冊である。

著者によれば、約 38 億年前に初期生物が誕生して以来、進化と絶滅を重ねた結果、地球上には約 1,000 万種の多様な生物が現存しているとのこと。この生物の多様性は、物質、植物、動物、時間（進化）の経過と蓄積の賜物である。このような多様な生物を絶滅によって失うことは、未来の多様性を育む生物資本を喪失し、未来の地球上の生命に打撃を与えかねない。これを避けるためには、この生物多様性を育ててきた舞台としての地球の環境を維持することが重要であることを懇切に解き明かしている。

地球環境を維持することの意味を熱力学的に考えると以下になるだろう。「(閉鎖系における) エントロピー増大の法則」にもかかわらず生命がエントロピーを増大させることなく生きていられるのは、生命系の外部に環境が存在し、この環境に生命系で発生したエントロピーを捨てることが出来るからである。もし生命系が閉じていれば生命系のエントロピーが増大し生命系は維持出来なくなってしまうが、幸い地球には階層的な多重構造を持った外部環境があるために生命が長時間存続されてきたわけである。そして、もし外部環境の変化が速くなると内側の変化はそれについてゆくことが出来なくなりその存在が危うくなるため、生命系の外部環境は定常的であることが重要である。著者の主張は、自然法則に照らしても誠に理にかなった指摘である。

本書は、実践編、基礎編、企業編で構成されている。実践編では、製鉄、機械、電機、化学、食品、建設、金融、運輸、商社等幅広い分野の企業 19 社における環境教育の実践例が紹介されるとともに、経団連自然保護協議会が企業の環境担当者や CSR 担当者を対象とした企業環



経団連出版

2014 年 10 月 20 日初版発行

269 頁／本体価格 2500 円＋税

著者 石原 博、岩淵 真奈美、湊 秋作

境教育研修の具体例や、企業と NGO とのコラボレーション事例が紹介されている。約半分のページを費やして多くの事例を紹介した実践編は、本書の白眉であり、自然保護活動に貢献しようとする企業やその関係者にとっては、企画立案から活動の推進に至るまでの指南書としても優れたものとなっている。基礎編では、生物多様性の意味と生物多様性に対する環境教育の役割と内容とが的確に解説されている。企業編では、企業にとっての生物多様性と企業における環境教育の役割とが実践編の内容と照応して述べられており、企業がなぜ環境教育に力を入れるべきかが納得出来るようになっている。

さらに本書では、環境教育活動における体験を通して生物多様性を学ぶことの重要性、人材育成の必要性、共に学ぶことの重要性等が指摘されており、環境教育だけでなく広く社会教育の実践の場においても有効なものとなっている。また、日本的自然観として「他の生命も人間と同位置に見ること」や「他への寛容性の重視」を語っているところは、日本文化論としても読むことが出来る。

(いしかわ とくや / (資) 技術情報企画)